



プロット内に生育する樹種全部を調査対象にした。  
 プロットの大きさは、1 m × 5 mとし、5 m間隔で6が所設定し、環境条件が同じくなるようにヤシマレント処理区と、無処理区を交互に配置した。

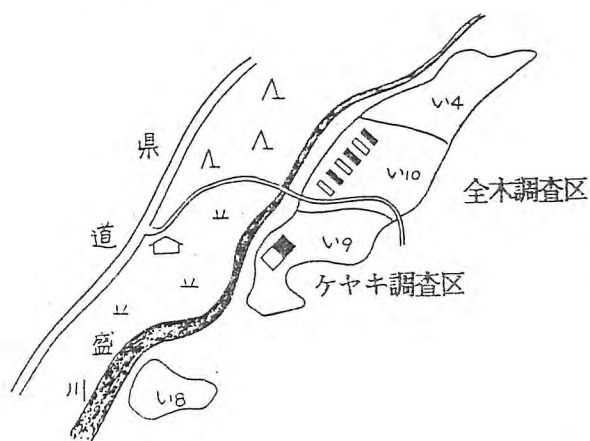
#### イ. ケヤキ調査区

ケヤキのみを調査対象にした。

天然生のケヤキも含めて、できるだけ多く生育している所を選び、5 m × 5 mのプロットを連続して2か所設定し、ヤシマレント処理区と無処理区とした。

薬剤処理の方法は、ゴム手袋を用いてヤシマレントを手袋に付け、それを木にすりつけた。

調査区配置図



#### 凡 例

■ 薬剤処理区  
 □ 無処理区

ケヤキ造林地  
 赤坂西風山国有林22林班  
 植栽年度

い <sub>4</sub>	1. 31ha	昭60
い <sub>10</sub>	1. 37	59
い <sub>9</sub>	1. 22	58
い <sub>8</sub>	0. 66	58

### (3) 食害の調査

食害の進行状況を記録するため、調査時点での新しい食痕を数えた。カウントした食痕はマジックインキで着色し、カウント済の目印とした。

従って食痕を一度カウントされた枝でもその後、着色した部分が採食されると、次回の調査でまたカウントされることになる。

調査スケジュールは、12月8日に調査区を設定し、以後1か月に2回調査を行い、若葉が出揃う5月初め頃まで継続することにした。

#### 4. ケヤキ造林地全般の観察

造林地内に生育するかん木等の樹形により、食害と生長の過程を判断すると、当年成長した若枝が冬に半分位まで採食され、翌年は新しい萌芽により生長し、冬にはまた採食され生長と採食のくり返しである。

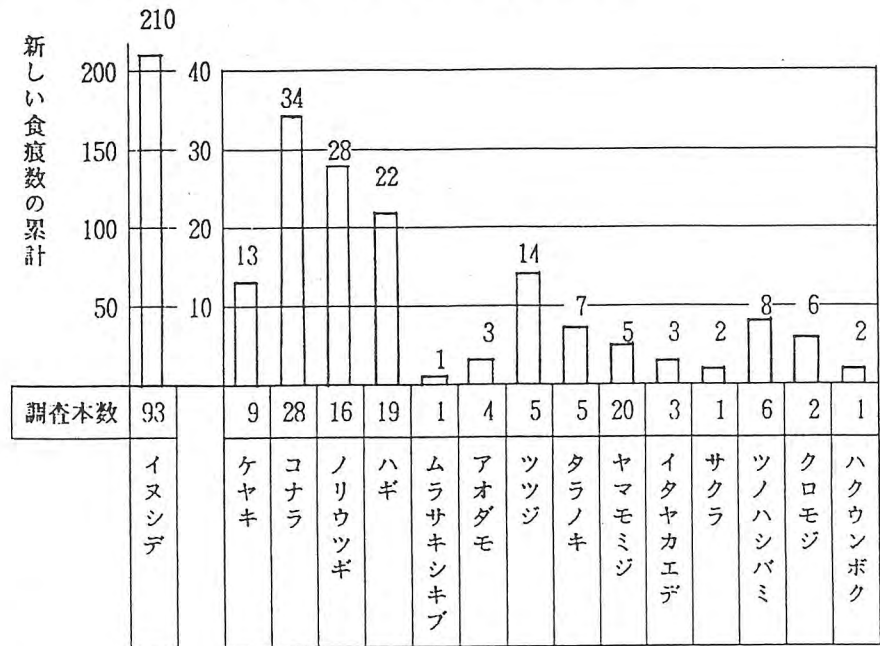
樹種別に見てもほとんど差異なく、どの樹種も食害に遭っており、無害で順調に生長している樹種は見あたらない。

食害部位は、夏の間生長した若枝が主体であるが、幹が生長してやや太くなったものは、樹皮を剥がして採食するため巻き枯らしのようになり、食害程度の強いものは枯死している。

#### 5 試験区の調査結果

新しい食痕数の推移をグラフに表すと次のようである。

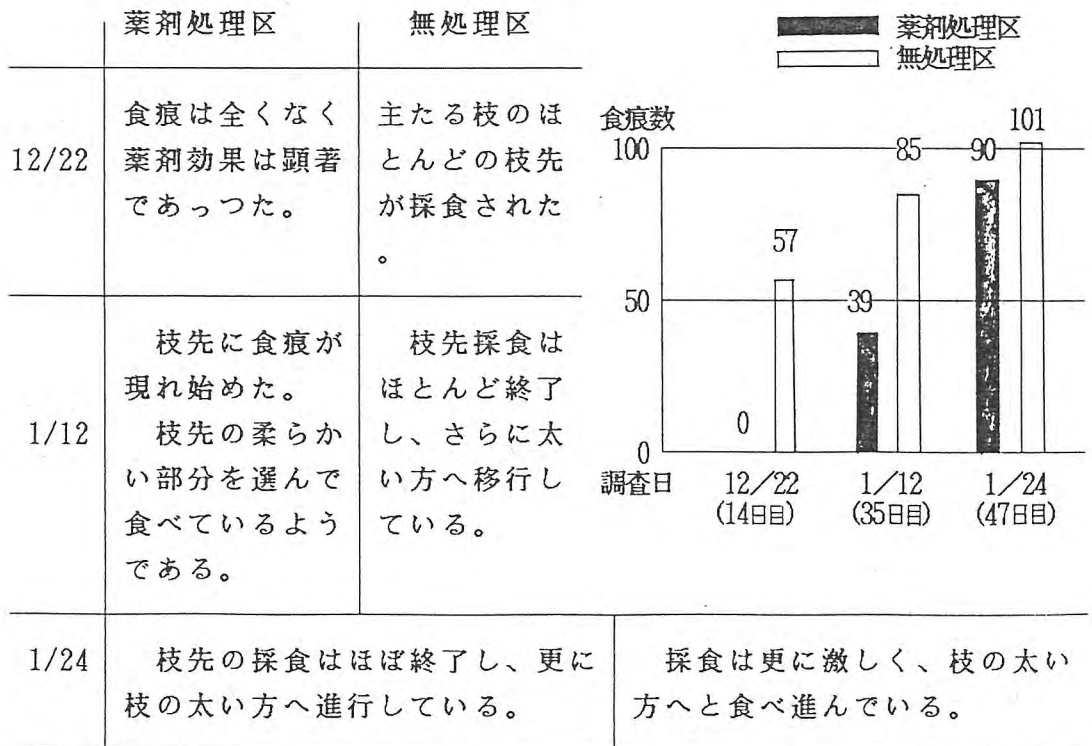
(1) 全木調査区、樹種別食痕数 (第3回調査までの累計)



このグラフは、薬剤処理区、無処理区の食痕数を合計したものである。樹種に関係なく、食害が進行していることがわかる。

(2) 全木調査区、食痕数の推移

調査区の状況説明

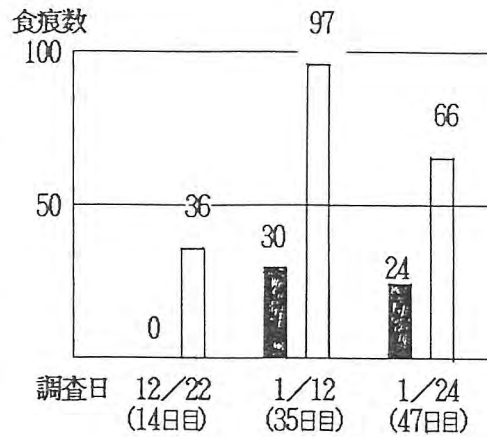


(3) ケヤキ調査区、食痕数の推移

枝先から食害が進行している様子は全木調査区と同様である。

調査対象外の他の樹種と比べてみても、進行状況はほとんど同様である。

第3回目の調査に於いて新しい食痕数が減少しているのは、ケヤキ造林木は全般に歪化して若枝が少ないため、採食の進行により食べる場所が少なくなったものである。



6. 考察

造林地や周辺の林地の観察、及び3回の試験区調査の結果、調査地周辺で最初に皆伐された22い。林小班(0.66ha)の食害が最も激しいことから、シカ棲息地における皆伐施業は、地上植生の同化能力を高めることになり餌が豊富になり、その結果、ホンシュウジカが多く集まり、集中して食害を受けることが予想される。

効果的な防除対策がなくては、成林させることは極めて困難であることを再認識した。

植栽樹種についても、ホンシュウジカは樹種にこだわらず採食し、樹種を選択することによる被害防除も困難である。

また、薬剤効果については、日数の経過とともに薄れてきているように思えるが、春までの調査で施業目的にかなうものか結論を出したい。